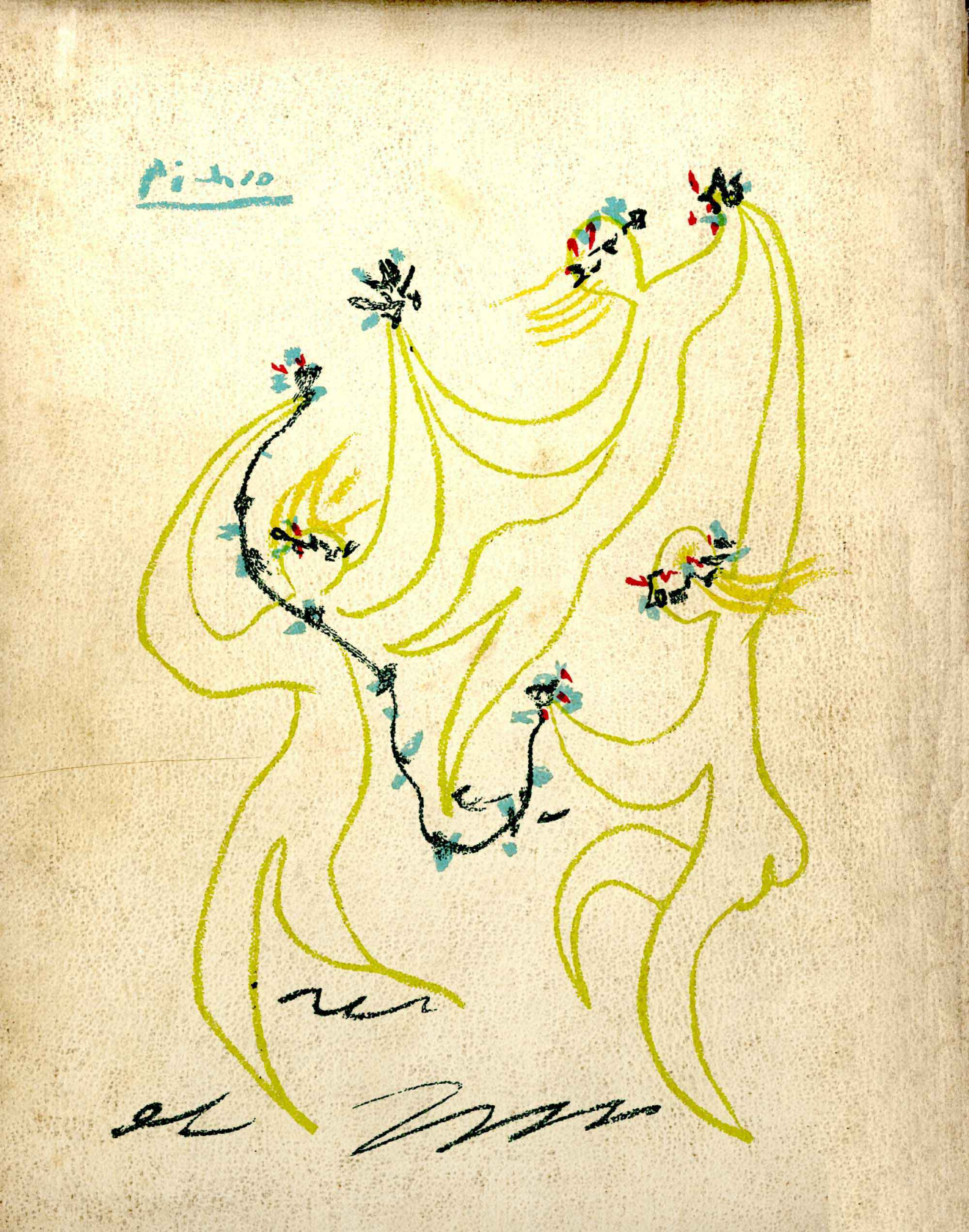
Picasso

ノーベル賞文学全集

NOBEL PRIZED LITERATURE

後援

スウェーデン・アカデミー

ノーベル財団

This collection of
the Nobel Prizes in Literature
is edited under
the patronage of
the Swedish Academy and
the Nobel Foundation.

ノーベル賞文学全集　16

川　端　康　成

授与演説および受賞演説の収録に際しては、集英社のご厚意を得ました。

昭和46年1月5日　発　行

発行者／石　川　数　雄
発行所／株式会社主婦の友社
東京都千代田区神田駿河台1-6
郵便番号　101
振　替　東京180番
電　話　東京294-1111（大代表）

印刷所／凸版印刷株式会社
製本所／寿製本株式会社
大口製本印刷株式会社
本文用紙／本州製紙株式会社
表紙クロス／日本クロス工業株式会社
製函／凸版印刷株式会社

© 主婦の友社　1971　Printed in Japan

0397-522162-3062

目次

選考経過…シェル・ストレムベリイ……武田勝彦訳…6
授与演説…アンダーシュ・エステルリング……武田勝彦訳…9
受賞演説…美しい日本の私――その序説……川端康成…11

伊豆の踊子……17
雪国……31
名人……87
千羽鶴……143
山の音……201
眠れる美女……319
片腕……361

人と作品

川端作品の系譜……長谷川　泉……376
川端文学——海外の反響……武田勝彦……383
年　譜……長谷川　泉／武田勝彦／鈴木靖子……389

著作目録

……長谷川　泉／武田勝彦／鈴木靖子……399

肖像画／ミッシェル・コーベ……4
カラーさしえ／ピエール・クレラン……24～25、40～41、56～57、152～153、216～217、248～249、280～281、328～329

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

川端康成

伊豆の踊子
雪国
名人
千羽鶴
山の音
眠れる美女
片腕

一九六八年受賞（七十歳）
（日本　一八九九～　）

川端康成

選考経過

授与演説

受賞演説

川端康成に対する
ノーベル文学賞授与の選考経過

元パリ駐在スウェーデン大使館
文化参事官
シェル・ストレムベリイ

ノーベル文学賞候補者リストに極東出身者の氏名が初めて登場したのは、一九五〇年のことであった。それは日本の作家ではなく、中国の哲学詩人林語堂であった。一九三八年度のノーベル賞受賞者であり、中国通として知られているパール・バックの推薦により、林語堂は候補者名簿にその名を連ねる資格を得たのであった。毛沢東の主権掌握以来、この詩人に関するうわさはもはや聞かれなくなってしまった。一九五八年には再びパール・バックによって、この名誉ある候補者に最初の日本人として、近代小説の巨匠、谷崎潤一郎が推薦された。この推薦は、一九六五年に谷崎がこの世を去るまで、幾度か西欧側からも日本側からも提出されたのであった。

六〇年代にはいると、その当初から他の三人の日本の作家たちが谷崎とはげしく競い合った。すなわち、感受性のゆたかな詩人であり、T・S・エリオットの翻訳者でもある日本文芸家協会推薦の西脇順三郎、日本ペンクラブから推薦され、一九四八年以来その真価を認められていたペンクラブ前会長川端康成、さらに小説家であり劇作家である三島由紀夫であった。三島は他の二人よりもはるかに若く、また西欧化されたところがあるにしても、最も嘱望されていた。谷崎の場合と同じように、川端、三島の作品は諸外国語に訳され、その名は広く西欧にも知られるようになっていたのである。

一九六八年、極東の作家として初のノーベル賞を勝ち得たのは川端康成であった。川端は前世紀のイギリス、フランス、ロシアのリアリズムの流れを汲んでいるところもあるが、日本文学の古い伝統に非常に深く根をおろしている、すぐれた小説家である。スウェーデン・アカデミーの幾分誇張的な授賞理由によると、「日本人の心の精髄を、すぐれた感受性をもって表現する、その叙述の巧みさに対して」ノーベル賞は川端に授けられたのであった。六八年度の八十三人の候補者中、最大の強敵はアイルランド生まれのフランスの劇作家サミュエル・ベケットであった。ベケットは不条理劇の父であり、スウェーデンにおいてきわめて活発な前衛的文壇人によって広く人々に紹介され、熱狂的支持を受けていた候補者であった。

川端の作品に関する最初の審査は、一九六一年にスウェーデン・アカデミーのノーベル委員会の答申に見られた。主唱者のペール・エリック・ワールンドは、良識に富む若い批評家であり、日本訪問後、極東の事物に深い関心を寄せていた。ワールンドは、原作によらず、英・仏・独の三カ国語に訳された数編の小説に基づいて判断を下さねばならないことを嘆いていたが、これはもっともな話であった。「雪国」はワールンド自身がエドワード・サイデンステッカー氏の英訳からスウェーデン語に重訳したものであったし、「千羽鶴」も一九五六年に独訳から重訳されたものであった。「水月」と「ほくろの手紙」はコロンビア大学のドナルド・キーン教授の編纂になる「現代日本文学選」に英訳が収録されていた。ワールンドは、神秘的な女性の心の動きを巧みに表現することと、四季おりおりの日本の風景を細叙することの二点を注目すべき特質として強調していたが、これは川端文学研究家の批評とほぼ軌を一にするものであった。ワールンドは、川端が独特な繊細さと独創性を兼ね備えた作家であると結んでいた。

ノーベル委員会から正式に任命された選考委員の評価は、のちに引用する諸国の専門家の批評によって推察しうるところであるが、川端がノーベル賞を受賞するにふさわしい作家として確認され、支持されていた。ハーバード大学の日本語および日本文学教授、ハワード・S・ヒベット氏は、谷崎、川端は日本文学というわくを越えて、世界文学にふさわしい作家であることを認めている。前述のドナルド・キーン氏は、川端と三島のいずれがノーベル賞に最もふさわしい作家であるかと迷ったあげく、年長者という理由で川端を選んでいるが、次の機会に三島が受賞することを希望している。日本の碩学（せきがく）の文芸評論

家、伊藤整氏は谷崎なきあとの日本の文壇では、川端がノーベル賞受賞者に値する唯一の作家であると明言している。

新受賞者のラジオ紹介にあたって、ノーベル委員会の委員長アンダーシュ・エステルリング氏は、作中に挿入された恋愛分析の巧妙さ、繊細な鋭い細部にわたる観察、微妙で神秘的な網目細工などの特質を前置きし、これらの特質は往々にしてヨーロッパの小説技法を凌駕するものであると述べている。さらに、氏は、川端の作品は日本画に類似した点があり、繊細な美に対する憧憬と自然の悲しさや人間の宿命の悲しさをあらわす象徴的な言葉に対する愛着が見られることを指摘している。前述のアングロサクソン系の批評家たちとは異なり、エステルリング氏は川端の「古都」を最もすぐれた作品と見なし、感情の抑揚がきわめて明確であると述べている。しかし、氏は、この作品には戦後の日本に蔓延したアメリカかぶれに対する警告も見られると付言している。氏は、川端によって日本が初めてノーベル文学賞受賞国の仲間入りをすることになったこと、また、その作品には道徳的かつ倫理的秩序の文化意識が表現されていること、さらに、それが東洋と西洋の精神的架橋を作ることに貢献したことに受賞の意義を要約している。

世界の新聞は、一九六八年度の受賞者の決定に関して、当を得ているとか、あるいは全く妥当であるとの批評を掲げたのであった。フランスでは『ル・モンド』紙が、その報道に三段抜きの紙面をさき、ルシアン・デュモン氏の署名入りで、川端の翻訳作品についての非常に丹念な分析を掲載したのであった。デュモン氏は「川端の各作品は人が最悪の窮状におかれていても、いかにして清澄な美を求める心を持ちつづけるものであるかを示している」と述べているが、かかる結論以外に何か他に異なった評価を下そうとしてもそれは徒労に終わることであろう。『ル・フィガロ』紙は川端の経歴と作品とを解説した後に、今回の受賞に対して不満のないことを次の如く述べている。すなわち、「今回もまたスウェーデン・アカデミーは、特に賞賛に値する個人よりも国に名誉を与えるという、ここ数年来の方針を守りつづけた。本年は、この方針を適用することについての幹部会議においては、ある迷いといったものが存在していたと思われる。しかし、ぜひとも日本人に賞を与えねばならないとすれば、老練の川端を選ぶことはいかなる異議をも引き起こすことにはならないのである」

日出ずる国の息子、川端の受賞が最も注目を集め、心からの賛同を得たのは北アメリカの新聞紙上であった。とりわけ『ニューヨーク・タイムズ』紙と『ニューヨーク・タイムズ書評』紙は、手放しで賞賛の辞を贈った。数多くの資料に基づいて書かれた人と作品に関する記事の中には、芸術と自由教育の虐殺として悪名高い中国のいわゆる文化大革命に対し、川端は抗議声明を発した日本の四人の作家の一人であった事実までもしるされている。ドナルド・キーン教授は、川端作品にとどまらず、日本の現代文学の全般的な状況を詳細に分析し、日本の現代作家の中でも古い伝統が最も滲透している川端が西欧の愛読者たちを引きつけたことに驚嘆している。日本人ですらも、川端の洗練された古風な文体は読みにくいものであると述べている。しかしながら、川端がノーベル文学賞の栄誉を受けた日本の最初の作家であったことを、非常に率直に喜んでいる。それは単に川端文学のすぐれた真価が認められるようになっただけではなく、今回のノーベル賞受賞によって、世界最古の日本の小説の伝統が、結局世界の文学の大きな流れと比肩しうるものであることが認められるようになったからである。川端の全く特殊な技法は、数人の英国系アメリカ人作家に対して明らかに好ましい影響を与えたことを彼ら自身が認めている。十九世紀の末葉には、最初のうちは西洋文学に反発したり、戸惑っていた日本の作家たちは、西洋文学から多くのことを学ぶようになっていた。つまり、日本の作家たちは、西洋文学の寄与に力を得て新しい文学を生み出し、別個の芸術を創造したのであった。キーン氏は、このように述べたのちに、氏の巧みな解説を次のように終わらせている。「川端の小説は、おそらく、これまで日本が長期にわたって西洋から受けた借金に対する返礼としての初めての贈り物と見なしうるであろう」

日本においては、川端受賞の報道は熱狂の渦を巻き起こし、大いに歓迎されたのであった。天皇と佐藤首相が祝詞を送った。一九四九年と一九六五年に二つのノーベル科学賞を与えられたことで、日本人はすでに満足していた。しかし、「源氏物語」や「能」の遠い古典時代以来、ここ十数年前までは、日本の文学は西欧には実際のところ未知のままであった。したがって、西欧の文学者の間でも日本文学はほとんど知られていなかった。

東京近郊の鎌倉にある川端の家にまではせ参じた多数の日本人および外国人の報道人たちを前にして、新しい受賞者は、次のように簡単に語ったのであった。「私は変に運がいいんです。私のもののような、西欧の小説にくらべるとささやかな作品が認められたわけですから、翻訳してくれた人、そのほかの人々のおかげさまです。私は日本文学の伝統に多少ふれた作品を書きつづけてきましたから、そのにおいが外国人にも感じられて、おもしろかったのではないのでしょうか」

総額三十五万スウェーデン・クローナ[1]の賞金を受け取るために、ストックホルムに到着したとき、川端は新聞への声明の中で再び非常に慎しみ深い態度を示し、「三十年あるいは五十年後になって初めて、本年のノーベル文学賞が有能な人の手に渡されたのであるかどうかがわかるようになりましょう」と述べたのであった。西洋の作家たちの中で、川端に重要な役割を果たした者がいるかどうか、また、作品に影響を及ぼした者がいるかどうかという質問に対して、川端はこれを肯定し、さらに、非常に謙虚に三人の偉大な小説家たち、すなわち、ツルゲーネフ、ドストイエフスキー、ストリンドベリーに負うところが多いと正確に答えたのであった。フランスにおける会見の際には、おそらく、川端はフローベールの名をあげ、そしてまた、おそらくマルセル・プルーストの名をあげることであろう。

ストックホルムのコンサート・ホールにおけるノーベル賞授与式にあたって、川端は日本の民族衣装である和服——黒い羽織、金茶色のはかま、白たび——を着ていたが、このいでたちは、小さな身体を衆人の注目の的にしたのであった。恒例の慣習に従って、名高い歌姫プリギット・ニールソンが、受賞の栄誉をたたえるために、短いソプラノの独唱を行なった。エステルリング氏が、例によって文学賞受賞者を賞賛する演説を行なった。内容は、数週間前選考結果をスウェーデン放送を通じて行なったものとほぼ同一のものであった。グスタフ六世国王は川端の手をしっかりと握りしめた。花で飾った座席に戻る前に、受賞者は、熱狂的な歓迎を示す参列者に感謝をあらわすために深く頭を下げながら、自分の胸にこの触感を秘めていたのであった。

このおごそかな祭典につづいてシティ・ホールの輝かしい大広間で祝宴が開かれた。この席で、川端は歌うような小さな声で、スウェーデン・アカデミーの演説者に対する短い感謝の言葉を述べた。これは日本語でなされたが、通訳者でもあり、わかつことのできない友人でもあるエドワード・サイデンステッカー氏によってただちに英訳された。その内容は、東洋人、インドのタゴールがノーベル文学賞を受賞して以来、過ぎ去った五十五年の歳月をしのばせるのに十分なものであった。日本人に与えられたこの最初のノーベル文学賞は、日本に深い感銘を与えたこと、そして、おそらく東洋の他の国々にも、また、国際的に知られていない他の国々にも同じような感動を与えたことを強調した。

川端はノーベル賞がひとり氏に対してのみ与えられた名誉であると考えられることを望まなかった。今回のノーベル賞授与が、新しい意味とより大きな関心を世界じゅうに与える可能性を考えたとき、氏の感激はよりいっそう深いものとなった。かくして、今日の文学はもちろんのこと、明日の文学も実を結ぶことによって、この賞は東洋と西洋の間の相互理解と友情の象徴となったのであった。古いブールス宮殿におけるスウェーデン・アカデミーの大広間で翌日行なわれた講演において、二つの世界の接近という主題をよりゆたかに発展させたのであった。

（武田勝彦訳）

1　約二四〇〇万円。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com

川端康成に対する ノーベル文学賞授与に際しての歓迎演説

スウェーデン・アカデミー常任幹事
アンダーシュ・エステルリング

一九六八年十二月十日

陛下
閣下
淑女
紳士各位

本年度のノーベル文学賞受賞者である日本の川端康成氏は、一八九九年に大商工業都市大阪で生まれました。お父さまは教養の高いお医者さまで、文学にも関心を持たれていました。しかしながら、ご両親が急逝されたため、幼くして、氏は好ましい教育環境を奪いとられました。孤児となったために、郊外に住んでいる、病弱で盲目のおじいさまのもとに預けられることになりました。この悲劇的な両親の死は、日本人は肉親の結合が強い点から見まして、二重の重要な意味があります。この事実は疑いもなく川端氏の人生観全体に影響を与えましたし、氏がのちに仏教哲学の研究をする理由の一つにもなりました。

東京帝国大学の学生のころに、氏は早くも作家になる決意を固めたのでした。絶えず休みなく専心没頭することが、文学を天職とする条件となっていますが、氏はその典型的な例であります。二十七才のとき、初めて人々の注目を集めた青春短編小説において、氏はひとりの学生の話を語りました。この主人公は秋の伊豆半島をただひとり旅していたとき、だれからも軽蔑されていた貧しい踊り子と出会い、いじらしいほどの恋におちいりました。踊り子は純情な心を開き、青年に深い純粋な愛情に至る道を示しました。民謡の悲しげな繰り返しのように、この主題は氏のその後の作品の中にもさまざまに変容されて幾度もあらわれてきます。これらの作品を通して、氏はご自身の価値観を表明しています。そして、長年の間に氏ははるか遠く日本の国境を越えて海外でも名声を博するようになったのです。実際には、氏の作品のうち、三編の小説と、数編の短編だけが、これまでにいくつかの言語に訳されているに過ぎません。これは明らかに翻訳が特にむずかしいことにもよりますし、翻訳は目のあらい濾過器でもあるからです。この濾過器にかけると、氏のゆたかな表現力に富む言葉のかずかずの微細なニュアンスが失われるに違いないのです。しかし、これまでに翻訳された氏の作品は、氏の個性からにじみ出た典型的な画像を十分に伝えています。

すでに鬼籍にはいった先輩にあたる谷崎氏と同じく、川端氏はヨーロッパの近代リアリズムの影響を受けていることは明白でありますが、しかし、氏は忠実に日本の古典文学にも足を踏み入れ、純粋に日本的な伝統の様式を擁護し、維持していこうとする傾向をはっきりと示しています。川端氏の叙事的技法には、繊細なニュアンスを持った詩が見いだされますが、その起源は十一世紀ごろの日本の紫式部のつづった生活と風俗の厖大な画面にまでさかのぼるものであります。

川端氏は、女性の心理を微細に観察する作家として、特に賞賛を受けています。氏はこの点でのすぐれた才能を二つの中編小説「雪国」と「千羽鶴」において示しております。これらの作品の中に、わたくしたちは艶めかしい挿話に輝きを与えるすばらしい才能、繊細な鋭い観察力、ささやかな神秘的な価値を持った網の目細工を見いだしますが、ヨーロッパの描写の技法をしのぐ場合もしばしばあります。川端氏の文章は、日本画を想起させることがあります。すなわち、川端氏は繊細な美を熱愛し、また、自然の生命や人間の宿命の存在をあらわす悲しみにあふれた象徴的な言葉を賞賛しているからです。表面にあらわれる行為のはかなさがもし水面にただよう水草になぞらえられるものならば、川端氏の散文には、純粋に日本的な微細な芸術である俳句が反映されていると申せましょう。伝統的な日本人の観念や、本質に関して、私たちはほとんど未知でありますから、氏の作品の核心に迫る

ことはとうてい不可能なように思われますが、作品を読んでみますと、西欧の近代作家の気質とある点での類似性を見いだせるような気がします。このことに関して、ツルゲーネフは、私たちの心に浮かんでくる最初の作家であります。というのは、ツルゲーネフもまた、きわめて感受性のゆたかな作家であり、偉大な才能を働かせて、旧い世界と新しい世界の変わり目の中にあって、厭世主義的傾向をもって、社会を詳細に描いたからでした。

川端氏の最近作に属する「古都」もまた、最も注目すべき作品で、六年前に完結され、スウェーデン語訳もあります。簡単にあらすじを申し上げましょう。貧しい両親に捨てられた幼い娘、千重子は太吉郎という商人夫婦に拾われ、日本の古いしきたりに従って育てられました。千重子は自分の出生の謎をひそかに自問する感じやすいまじめな人柄です。日本の俗間に伝わっている迷信によりますと、捨て子は生涯不運に悩まされることになっておりますが、千重子の場合はふた子であったために、さらに恥のしるしを負うことになります。ある日、千重子は京都郊外にある北山杉出身の美しい若い娘に出合いますが、この娘こそふた子の姉妹の片割れであることに気づきます。たくましいほどの働き者の苗子と、繊細に育てられた千重子は、社会的な身分による隔てを超越して仲むつまじく交わるようになります。しかし驚くほどこの二人が似ているために、錯綜と混乱とを引き起こすことにもなります。物語全体の背景として、京都が選ばれ、四季おりおりの祭りの情景が描かれております。しかも、満開の桜の春から、きらめく雪の冬までの一年間にわたっています。したがって京都の町それ自体が主要な登場人物になっております。かつて京都は日本の首都で天皇（みかど）とその臣下たちが住んでいました。千年の後の現在でも、相変わらず何ものも侵すことのできないほど浪漫的な聖域として残され、芸術と洗練された工芸家や職人の源ともなっております。また、今日では観光都市として、人々から愛好されております。神社仏閣、職人たちの住む古い街、庭園、植物園などの風景を、川端氏は、感傷的に誇張することなく、感動的な手法をもって鋭敏にまた丹念に表現しておられますが、作中には詩的な情緒が滲透しております。

川端氏は、日本の決定的な敗北を体験し、その復興には進取の精神、生産力、労働力などが必要であると、おそらく認識されたことでありましょう。しかし、戦後の強烈なアメリカかぶれのさ中にありながらも、氏はその作品を通して、古い日本の美と個性の中の何かを新しい日本のために守り抜かねばならないことをおだやかな調子で呼びかけているのです。それは氏が京都の宗教的儀式を描く場合にも、伝統的な帯の図柄を選ぶ場合にも細心の注意を払っていることからも読みとれることです。この作品に表現されているこれらのさまざまな情景は、記録としても貴重なものであります。しかし読者の中には、次のようなきわめて特殊な個所に注目することを好まれるかたもいらっしゃるでしょう。アメリカの進駐軍は、植物園内に廠舎を作り、長い間、植物園を閉鎖していました。植物園が開放されると、すばらしい楠の並み木道は従前どおりなんの危害も受けずに残され、今もってこの並み木をよく知っている人の目を見張らせることができるかどうかを、中産階級の市民たちが見に来るくだりであります。

川端康成氏の受賞によって、日本は初めてノーベル文学賞受賞国の仲間入りをすることになりました。この決定には、本質的に重要な点が二つあります。すなわち、その一つは、川端氏が卓越した芸術的手法をもって、道徳的かつ倫理的文化意識を表現されたことであります。もう一つは、東洋と西洋の精神的架橋を作ることに貢献されたことであります。

川端様

この賞状は、すぐれた感受性をもって日本人の心の精髄を表現したあなたの小説技法をたたえるものであります。

本日、この壇上にあなたを名誉ある遠来の賓客としてお迎えいたしますことは、わたくしたちの喜びとするところであります。

スウェーデン・アカデミーを代表して、わたくしは、わたくしたちの心からなるお祝いを表したいと存じます。と同時に、国王陛下の御手から、本年度のノーベル文学賞をお受けになるようお願いいたします。

（武田勝彦訳）

受賞演説

川端康成

美しい日本の私―その序説―

春は花夏ほととぎす秋は月
　冬雪さえて冷しかりけり

道元禅師[1](一二〇〇年―五三年)の「本来ノ面目」と題するこの歌と、

雲を出でて我にともなふ冬の月
　風や身にしむ雪や冷めたき

明恵上人[2](一一七三年―一二三二年)のこの歌とを、私は揮毫をもとめられた折りに書くことがあります。

明恵のこの歌には、歌物語と言えるほどの、長く詳しい詞書きがあって、歌のこころを明らかにしています。

元仁元年(一二二四年)十二月十二日の夜、天くもり月くらきに花宮殿[3]に入りて座禅す。やうやく中夜[4]にいたりて、出観[5]の後、峰の房より下房へ帰る時、月雲間より出でて、光り雪にかがやく。狼の谷に吼ゆるも、月を友として、いと恐ろしからず。下房に入りて後、また立ち出でたれば、月また曇りにけり。かくしつつ後夜の鐘の音聞こゆれば、また峰の房へのぼるに、月もまた雲より出でて道を送る。峰にいたりて禅堂に入らんとする時、月また雲を追ひ来て、向うの峰にかくれんとするよそほひ、人しれず月の我にともなふかと見ゆれば、

この歌。それにつづけて、

山の端に傾ぶくを見おきて峰の禅堂にいたる時、
　山の端にわれも入りなむ月も入れ
　　夜な夜なごとにまた友とせむ

明恵は禅堂に夜通しこもっていたか、あるいは夜明け前にまた禅堂に入ったかして、

禅観のひまに眼を開けば、有明けの月[8]の光、窓の前にさしたり。我身は暗きところにて見やりたれば、澄める心、月の光に紛るる心地すれば、

　隈もなく澄める心の輝けば
　　我が光とや月思ふらむ

西行[9]を桜の詩人ということがあるのに対して、明恵を「月の歌人」と呼ぶ人もあるほどで、

　あかあかやあかあかあかやあかあかや
　　あかあかあかやあかあかあかや月

と、ただ感動の声をそのまま連ねた歌があったりしますが、夜半から暁までの「冬の月」の三首にしても、「歌を詠むとも実に歌とも思はず」

1 希玄道元。鎌倉初期の禅僧で、日本曹洞宗の開祖。宋に渡って如浄から曹洞禅を学んで帰国、永平寺を建立した。主著に「正法眼蔵」九十五巻がある。

2 いみなは高弁。鎌倉初期の禅僧で、華厳宗を中興した。高雄山の文覚に師事し、また華厳・密教を学び、栄西について禅をきわめた。後鳥羽上皇から栂尾山を賜って高山寺と称し、華厳宗の道場とした。主著に「華厳唯心義釈」「摧邪輪」などがある。

3 京都市右京区梅ヶ畑栂尾の高山寺の後方にある明恵上人七処の遺跡の一つである樗伽山の庵室。

4 六時の一つ。亥の刻から丑の刻まで。午後十時から午前二時ごろの間をいう。

5 禅定から出ることをいう。禅定は心を一つところに集中して、しずかに真理を考えること。

6 六時の一つ。寅の刻。夜半から朝にかけてをいう。

7 禅定に思いをひそめること。

8 月がまだありながら夜が明ける、その月。

9 一一一八～九〇。平安後期から鎌倉初期の歌人。俗名は佐藤義清。鳥羽院の北面の武士であったが、出家して諸国を行脚し、自然を友とした。歌集に「山家集」がある。

ず。」(西行の言)の趣きで、素直、純真、月に話しかける言葉そのままの三十一文字で、いわゆる「月を友とする」よりも月に親しく、月を見る我が月になり、我に見られる月が我になり、自然に没入、自然と合一しています。暁前の暗い禅堂に座って思索する僧の「澄める心」の光りを、有明けの月は月自身の光りと思うだろうという風であります。

「我にともなふ冬の月」の歌も、長い詞書きに明らかのように、明恵が山の禅堂に入って、宗教、哲学の思索をする心と、月が微妙に相応じ相交わるのを歌っているのですが、私がこれを借りて揮毫しますのは、まことに心やさしい、思いやりの歌とも受け取れるからであります。雲に入ったり雲を出たりして、禅堂に行き帰りする我の足もとを明るくしてくれ、狼の吼え声もこわいと感じさせないでくれる「冬の月」よ、風が身にしみないか、雪が冷めたくないか。私はこれを自然、そして人間にたいする、あたたかく、深い、こまやかな思いやりの歌として、しみじみとやさしい日本人の心の歌として、人に書いてあげています。

そのボッティチェリ[1]の研究が世界に知られ、古今東西の美術に博識の矢代幸雄[2]博士も「日本美術の特質」の一つを「雪月花の時、最も友を思ふ。」という詩語に約められるとしています。雪の美しいのを見るにつけ、月の美しいのを見るにつけ、つまり四季折り折りの美に、自分が触れ目ざめる時、美にめぐりあう幸いを得た時には、親しい友が切に思われ、このよろこびを共にしたいと願う、つまり、美の感動が人なつかしい思いやりを強く誘い出すのです。この「友」は、広く「人間」ともとれましょう。また「雪、月、花」という四季の移りの折り折りの美を現わす言葉は、日本においては山川草木、森羅万象、自然のすべて、そして人間感情をも含めての、美を現わす言葉とするのが伝統なのであります。そして日本の茶道も、「雪月花の時、最も友をおもふ」のがその根本の心で、茶会はその「感会」、よい時によい友どちが集うよい会なのであります。――ちなみに、私の小説『千羽鶴』は、日本の茶の心と形の美しさを書いたと読まれるのは誤りで、今の世間に俗悪となった茶、それに疑いと警めを向けた、むしろ否定の作品なのです。

春は花夏ほととぎす秋は月
冬雪さえて冷しかりけり

この道元の歌も四季の美の歌で、古来の日本人が春、夏、秋、冬に、第一に愛でる自然の景物の代表を、ただ四つ無造作にならべただけの、月並み、常套、平凡、この上ないと思えば思え、歌になっていない歌と言えば言えます。しかし別の古人の似た歌の一つ、僧良寛[3](一七五八年―一八三一年)の辞世、

形見とて何か残さん春は花
山ほととぎす秋はもみぢ葉

これも道元の歌と同じように、ありきたりの事柄とありふれた言葉を、ためらいもなく、と言うよりも、ことさらもとめて、連ねて重ねるうちに、日本の真髄を伝えたのであります。まして、良寛の歌は辞世です。

霞立つ永き春日を子供らと
手毬つきつつこの日暮らしつ

風は清し月はさやけしいざ共に
踊り明かさむ老いの名残りに

世の中にまじらぬとにはあらねども
ひとり遊びぞ我はまされる

これらの歌のような心と暮らし、草の庵に住み、粗衣をまとい、野道をさまよい歩いては、子供と遊び、農夫と語り、信教と文学との深さを、むずかしい話にはしないで、「和顔愛語」の無垢な言行とし、しかも、詩歌と書風と共に、江戸後期、十八世紀の終りから十九世紀の始め、日本の近世の俗習を超脱、古代の高雅に通達して、現代の日本でもその書と詩歌をはなはだ貴ばれている良寛、その人の辞世が、自分は形見に残すものはなにも持たぬし、なにも残せるとは思わぬが、自分の死後も自然はなお美しい、これがただ自分のこの世に残す形見になってくれるだろう、という歌であったのです。日本古来の心情がこもっているとともに、良寛の宗教の心も聞える歌です。

いついつと待ちにし人は来りけり
今は相見てなにか思はん

このような愛の歌も良寛にはあって、私の好きな歌ですが、老衰の加わった六十八歳の良寛は、二十九歳の若い尼、貞心とめぐりあって、うるわしい愛にめぐまれます。永遠の女性にめぐりあえたよろこびの歌とも、待ちわびた愛人が来てくれたよろこびの歌とも取れます。

「今は相見てなにか思はん」が素直に満ちています。

良寛は七十四歳で死にました。私の小説の『雪国』と同じ雪国の越後、つまり、シベリアから日本海を渡って来る寒風に真向いの、裏日本の北国、今の新潟県に生まれて、生涯をその雪国に過ごしたのでしたが、老い衰えて、死の近いのを知った、そして心がさとりに澄み渡っていた、この詩僧の「末期の眼」には、辞世にある、雪国の自然がなお美しく映ったであろうと思います。私に『末期の眼』という随筆がありますが、ここでの「末期の眼」という言葉は、芥川龍之介（一八九二年―一九二七年）の自殺の遺書から拾ったものでした。その遺書のなかで、殊に私の心を惹いた言葉です。「所謂生活力という」、「動物力」を「次第に失っているであろう」、

僕の今住んでいるのは氷のように透み渡った、病的な神経の世界である。（中略）僕がいつ敢然と自殺出来るかは疑問である。唯自然はこういう僕にはいつもよりも一層美しい。君は自然の美しいのを愛ししかも自殺しようとする僕の矛盾を笑うであろう。けれども自然の美しいのは、僕の末期の眼に映るからである。

一九二七年、芥川は三十五歳で自殺しました。私は『末期の眼』のなかにも「いかに現世を厭離するとも、自殺はさとりの姿ではない。いかに徳行高くとも、自殺者は大聖の域に遠い。」と書いていまして、芥川やまた戦後の太宰治（一九〇九年―四八年）などの自殺を讃美するものでも、共感するものでもありません。しかし、これも若く死んだ友人[5]、日本での前衛画家の一人は、やはり年久しく自殺を思い「死にまさる芸術はないとか、死ぬることは生きることだとかは、口癖のようだったそう」（『末期の眼』）ですが、仏教の寺院に生まれ、仏教の学校を出たこの人の死の見方は、西洋の死の考え方とはちがっていただろうと、私は推察したものでした。「もの思ふ人、誰か自殺を思はざる。」でしょうが、そのことで私の胸にある一つは、あの一休禅師[6]（一三九四年―一四八一年）が、二度も自殺を企てたと知ったことであります。

ここで一休を「あの」と言いましたのは、童話の頓智和尚として子供たちにも知られ、無礙奔放な奇行の逸話が広く伝わっているからです。「童児が膝にのぼって、ひげを撫で、野鳥も一休の手から餌を啄む。」という風で、これは無心の極みのさま、そして親しみやすくやさしい僧のようですが、実はまことに峻厳深念な禅の僧であったのです。天皇の御子であるとも言われる一休は、六歳で寺に入り、天才少年詩人のひらめきも見せながら、宗教と人生の根本の疑惑に悩み「神あらば我を救へ。神なくんば我を湖底に沈めて、魚の腹を肥せ。」と、湖に身を投げようとして引きとめられたことがあります。またのちに、一休の大徳寺の一人の僧が自殺したために、数人の僧が獄につながれた時、一休は責任を感じて「肩の上重く」、山に入って、食を絶ち、死を決したこともあります。

一休はその「詩集」を自分で『狂雲集』と名づけ、狂雲とも号しました。そして『狂雲集』とその続集には、日本の中世の漢詩、殊に禅僧の詩としては、類いを絶し、おどろきに胆をつぶすほどの恋愛詩、閨房の秘事までをあらわにした艶詩が見えます。一休は魚を食い、酒を飲み、女色を近づけ、禅の戒律、禁制を超越し、それらから自分を解放することによって、そのころの宗教の形骸に反逆し、そのころ戦乱で崩壊の世道人心のなかに、人間の実存、生命の本然の復活、確立を志したのでしょう。

一休のいた京都紫野の大徳寺は、今日も茶道の本山のさまですし、一休の墨蹟も茶室の掛け物として貴ばれています。私も一休の書を二

1 Sandro Botticelli（一四四七～一五一〇）。イタリアの画家。ルネッサンスにおけるフィレンツェの代表画家で、繊細・華麗な様式を確立した。

2 一八九〇～。横浜生まれの美術史家、美術評論家。東大英文学科を卒業。欧米に留学し、イタリア絵画を研究、ボッティチェリ論をイギリスで発表して有名になった。著書に「日本美術の特質」「Sandro Botticelli」がある。

3 越後の禅僧。大愚と号した。生涯寺を持たず、諸国を行脚し、自然を友とした。和歌、書、漢詩に独自の境地を開いた。

4 にこにこ顔で人なつっこいことばをかけるさま。

5 日本での前衛画家の一人、古賀春江（一八九五～一九三三）をさす。福岡県生まれの洋画家。大正大学中退。川端康成と親交があった。前衛芸術の手法を用い情趣的超現実主義の画風であった。

6 一休宗純。奇行をもって知られ、孤立した禅風を大衆化した。京都市北区紫野の大徳寺四八世を継いだ。茶の湯の導入によって他の禅寺と違ったふんいきをつくった。詩集「狂雲集」がある。

幅所蔵しています。その一幅は、「仏界入り易く、魔界入り難し。」と一行書きです。私はこの言葉に惹かれますから、自分でもよくこの言葉を揮毫します。意味はいろいろに読まれ、またむずかしく考えれば限りがないでしょうが、「仏界入り易し」につづけて「魔界入り難し」と言い加えた、その禅の一休が私の胸に来ます。究極は真・善・美を目ざす芸術家にも「魔界入り難し」の願い、恐れの、祈りに通う思いが、表にあらわれ、あるいは裏にひそむのは、運命の必然でありましょう。「魔界」なくして「仏界」はありません。そして「魔界」に入る方がむずかしいのです。心弱くてできることではありません。

逢レ仏殺レ仏　逢レ祖殺レ祖

これはよく知られた禅語ですが、他力本願と自力本願とに仏教の宗派を分けると、勿論自力の禅宗にはこのように激しくきびしい言葉もあるわけです。他力本願の真宗の親鸞（一一七三年―一二六二年）の「善人往生す。いはんや悪人をや。」も、一休の「仏界」「魔界」と通う心もありますが、行きちがう心もあります。その親鸞も「弟子一人持たず候。」と言っています。「祖に逢へば祖を殺し」、「弟子一人持たず」は、また芸術の厳烈な運命でありましょう。

禅宗に偶像崇拝はありません。禅寺にも仏像はありますけれども、修行の場、坐禅して思索する堂には仏像、仏画はなく、経文の備えもなく、瞑目して、長い時間、無言、不動で座っているのです。そして無念無想の境に入るのです。「我」をなくして「無」になるのです。この「無」は西洋風の虚無ではなく、むしろその逆で、万有が自在に通う空、無涯無辺、無尽蔵の心の宇宙なのです。禅でも師に指導され、師と問答して啓発され、禅の古典を習学するのは勿論ですが、思索の主はあくまで自己、さとりは自分ひとりの力でひらかねばならないのです。そして、論理よりも直観です。他からの教えよりも、内に目ざめるさとりです。真理は、「不立文字」であり「言外」にあります。維摩居士の「默如レ雷」まで極まりもしましょう。中国の禅宗の始祖、達磨大師は「面壁九年」と言いまして、洞窟の岩壁に向って九年間座りつづけながら、沈思黙考の果てに、さとりに達したと伝えられています。禅の坐禅はこの達磨の坐禅から来ています。

問へば言ふ問はねば言はぬ達磨どの
心の内になにかあるべき　（一休）

また、同じ一休の道歌

心とはいかなるものを言ふならん
墨絵に書きし松風の音

これは東洋画の精神でもあります。東洋画の空間、余白、省筆も、この墨絵の心でありましょう。「能画二一枝一風有レ声」（金冬心）です。

道元禅師にも「見ずや、竹の声に道を悟り、桃の花に心を明るむ。」との言葉があります。日本の花道、生け花の名家の池坊専応も、その「口伝」に「ただ小水尺樹をもって、江山数程の勝機（おもむき）を現はし、暫時傾刻のあひだに、千変万化の佳興をもよほす。あたかも仙家の妙術と言ひつべし。」と言っています。日本の庭園もまた大きい自然を象徴するものです。西洋の庭園が多くは均整に造られるのにくらべて、日本の庭園はたいてい不均整に造られますが、不均整は均整よりも、多くのもの、広いものを象徴出来るからでありましょう。勿論その不均整は、日本人の繊細微妙な感性によって釣り合いが保たれての上であります。日本の造園ほど複雑、多趣、綿密、したがってむずかしい造園法はありません。「枯山水」という、岩や石を組み合わせるだけの法は、その「石組み」によって、そこにない山や川、また大海の波の打ち寄せるさまをまでを現わします。その凝縮を極めると、日本の盆栽となり、盆石となります。「山水」という言葉には、山と水、つまり自然の景色、山水画、つまり風景画、庭園などの意味から、「ものさびたさま」とか、「さびしく、みすぼらしいこと」とかの意味まであります。しかし「和敬清寂」の茶道が尊ぶ「わび・さび」は、勿論むしろ心の豊かさを蔵してのことですし、極めて狭小、簡素の茶室は、かえって無辺の広さと無限の優麗とを宿しております。

一輪の花は百輪の花よりも花やかさを思わせるのです。開き切った花を生けてはならぬと、利休も教えていますが、今日の日本の茶でも、茶室の床にはただ一輪の花、しかもつぼみを生けることが多いのであります。冬ですと、冬の季節の花、たとえば「白玉」とか「侘助」とか名づけられた椿、椿の種類のうちでも花の小さい椿、その白をえらび、

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook.com